

# 王守仁の白鹿洞書院石刻をめぐる

——「大学古本序」最終稿の所在——

鶴 成 久 章

はじめに

王守仁が朱熹の学説を批判的に乗り越え、自らの思想的境地を確立する上で極めて重要な意味を持ったのはその『大学』解釈である。彼は、朱熹の『大学』改本と「格物」補伝を痛烈に批判し、旧本『礼記』中の「大学篇」を『古本大学』として顕彰し、それを自己の思想構築の基盤に据えたのである。

王守仁の『大学』解釈については、正徳十三年（一五一八）四十七歳の七月に『古本大学』を刊行した際に執筆した「大学古本序」、『古本大学』の注釈である『古本大学傍釈』<sup>①</sup>、最晩年に思恩・田州の乱討伐に出征するに当たって銭徳洪（字は洪甫、餘姚の人、嘉靖十一年進士）に授けた『大学問』、及び『伝習録』をはじめその他の著作の随所に見えるが、その最も根本的な思想を集約した文章こそ「大学古本序」にほかならない。

この「大学古本序」は、現在、『王文成公全書』<sup>②</sup>卷七（『文録四』）に収録されたものが定本として通行している。し

かしながら、王守仁自身が、「短序は、かつて三度稿を改めた。石刻がその最終版である。（短序、亦嘗三易稿。石刻其最後者。）」（『文録二』「与黄勉之」）と語っていることにより、少なくとも三度の改稿がなされたことが知られる。ところが、その最終稿とされる「石刻」が、一体いつどこで刻されたのかという問題について具体的に言及した研究はないように思う。

そこで、小論では「大学古本序」の最終稿とされる石刻が、現在も白鹿洞書院に遺されている王守仁の手跡の石刻である可能性は無いのか考察してみたい。

## 一、白鹿洞書院の石刻

白鹿洞書院には王守仁が残した石刻が現在も複数伝わっているとされる。そして、それらの石刻のうち、学術的な観点からみて重要な意味を持つと思われるのが、「修道説」「中庸古本」「大学古本序」「古本大学」という四篇の文章を刻した三基の石刻の存在である。<sup>3)</sup>

この石刻がいつ刻されたのかは定かではない。ただ、石刻の末尾に記された日付は、「正徳戊寅七月丙午」になっている。なお、四篇の文章のうち、『中庸古本』を除いた三者についてはその制作時期が明らかである。すなわち、『古本大学』『大学古本序』については、『年譜一』の記載や『文録四』の紀年によって正徳十三年七月のこととわかり、また「修道説」についても、同年の作であることがわかる。つまり、石刻に記された正徳戊寅七月とは、まさに『古本大学』が刊行され「大学古本序」が書かれた月にほかならず、またその同じ年内に「修道説」も書かれているのである。だが、

この正徳十三年七月の時点では、王守仁は南贛提督として流賊の掃討戦に従事しており、わざわざ白鹿洞書院まで直接赴いて石刻をなしたとは考えがたい。

ところで、中国を代表する書院の一つである白鹿洞書院では多くの「書院志」が編纂されており、明清時代に編纂された「書院志」は今も複数伝わっている。そのうちの一つである鄭廷鵠撰『白鹿洞志』<sup>4</sup> 卷六には「陽明先生王守仁遺洞修道説石刻」「遺洞大学古本序石刻」として、王守仁の「修道説」「大学古本序」の石刻の翻刻が掲載されている。そして、この石刻文を『白鹿洞志』に掲載した編者の江西按察使副使の鄭廷鵠（字は元侍、瓊山の人、嘉靖十七年進士）は、朱熹の学説を痛烈に批判した王守仁の著作を「書院志」に載録すると、惑乱をひろめることになるのではないかという批判もある中で、敢えて王守仁の文章を「書院志」に載録する理由を次のように説明している。

按ずるに、二石刻は、実に陽明の手書を石に刻んだものである。千里の彼方よりこれを洞中にもたらしたのは、「朱」文公に「誤りを」正してもらおうと思つたからである。だから、これを「『白鹿洞志』」に載録するのである。（按二刻迺陽明手書入石、千里而致之洞中、是欲求正於文公也。故録之。）

もし、鄭廷鵠が言うように、王守仁が門人等に命じて千里の彼方からこれらの文章を白鹿洞書院までもたらしたと考えれば、「大学古本序」等を執筆した正徳十三年七月からそれほど遠くない時期に、石に刻むことは可能であつたであろう。しかしながら、明らかに朱熹の学問に異を唱える内容の文章を、朱熹が復興に尽力し、また講学を主宰した白鹿洞の地に刻することを、その当時の白鹿洞書院の関係者が果たして簡単に受け入れたであろうか。現に、嘉靖年間に鄭廷鵠がこの石刻の文章を『白鹿洞志』に翻刻しようとしたのに対して、根強い批判が有つたことを先引の部分の後に述べているのである。<sup>5</sup>

他方、何より白鹿洞書院の石刻が、正徳十三年七月から間もない時期になされたという見方がほとんど成り立ち得ない理由として、白鹿洞書院に現在も残る石刻の文章の内容の問題がある。先述のように、王守仁の「大学古本序」は三度書き換えられ、その最終稿が「石刻」であると自身が書簡中で語っている。そして、その最終稿とは、『王文成公全書』に載録される文章であると考えるべきであろう。そこで、いま実際に『全書』所載の「大学古本序」と白鹿洞書院の石刻文とを比較してみると、両者は全く同一の文章であることがわかる。衆知の如く、『全書』所載の「大学古本序」は、正徳十六年頃<sup>⑥</sup>に王守仁が「致良知」説を提唱した際、「致良知」説の思想に基づいて改稿されたと従来考えられてきた。小論では、後述するように、「致良知」説の確立と「大学古本序」の最終稿の脱稿はほぼ同時であったと考えているが、いずれにしても、白鹿洞書院に残された石刻の文章が『全書』所載の「大学古本序」と同文である以上、この石刻文を正徳十三年七月に王守仁が『古本大学』を刊行した時に附した原序とみなすことはできない。

## 二、『古本大学』をめぐる羅欽順からの批判

『年譜二』の記載、及び羅欽順（字は允升、号は整庵、泰和の人、弘治六年進士）の『困知記』<sup>⑦</sup>三統に載せられた書簡の日付によれば、正徳十五年春、王守仁は郷里の泰和県に帰省中の羅欽順に『古本大学』『朱子晚年定論』を送っている。そして、羅欽順は『困知記』三統に、この時に王守仁から送られてきた『古本大学』の序文を全文載録している。ところが、よく知られているように、『困知記』所載の「大学古本序」と『王文成公全書』に収録する序文とは文章がかなり異なっている。この問題については羅欽順自身が、

さてこれがその全文である。冒頭から末尾まで数百言だが、「致知」には全く一言も言及していない。近頃『陽明文録』を見ると、「大学古本序」があり、はじめて「致知」を用いてあらためて説を立てており、「格物」については新たなことを提起していない。その結語には、「知を致すというのは、心に悟ることである。知を致せば、「心は」尽くされる。」と言っている。陽明の学術は、「良知」を大頭脳にしているが、最初に『古本大学』に序文を書いた時には、はつきりと朱子の「伝注」を支離であると排斥していながら、どうして大頭脳をかえって漏らしてしまったのであろう、まだその構想が定まっていなかったのであろうか。二種類の序文をあわせてながめてみると、措辞は適切で、うまく調子を合わせており、なかなか手が込んでいけると言える。しかしながら『大学』の本旨については、陰離陽合の痕跡をどうして覆い隠すことができようか。（夫此其全文也。首尾数百言、並無一言及於致知。近見陽明文録、有大学古本序、始改用致知立説、於格物更不提起。其結語云、乃若致知、則存乎心悟。致知焉尽矣。陽明学術、以良知為大頭脳、其初序古本大学、明斥朱子伝註為支離、何故却將大頭脳遺下、豈其擬議之未定歟。合二序而觀之、安排布置、委曲遷就、不可謂不勞矣。然於大学本旨、惡能掩其陰離陽合之迹乎。）と述べている。

王守仁が羅欽順に『古本大学』を送った直後の正徳十五年四月から五月にかけての時期には、羅欽順から、『古本大学』に基づく王守仁の『大学』解釈の矛盾や同時に送った『朱子晚年定論』の編纂の杜撰さを批判する内容の書簡（『困知記』附録「与王陽明」）が王守仁に送られている。その書簡に拠れば、羅欽順は南京任官時代の王守仁と既に面識があり、また、守仁から『古本大学』『朱子晚年定論』を贈られる前年の夏には、友人から『伝習録』を見せてもらっていたこともわかる。『年譜二』によると、この羅欽順からの鋭い批判の書簡に対して、王守仁は六月に返書を送っている。そ

の論学書簡こそ、現行本『伝習録』巻中に収録されている「答羅整庵少宰書」である。

その末尾において、王守仁が、「あなたが数百言も費やしてお教え下さったのは、私の格物説を十分に理解されなかったからであります。（執事所以教反覆数百言、皆以未悉鄙人格物之説。）<sup>⑩</sup>」というように、両者の議論の争点は「格物」解釈の問題にあったと言つてよい。なお、羅欽順が王守仁に送った書簡によつてそれを確認すると次の通りである。

もし学問は外に求める必要がなく、ただ内観・内省につとめるべきであるというのなら、「正心誠意」の四字に何の不足があるのでしよう。どうして入門の際に「格物」という一段の工夫で苦しむ必要があるのでしょうか。ただ、経書にこの文がある以上、道理からして尊信すべきであり、またこれを扱わないわけにはいかないので、それでその訓詁をなして、「物は、意の用である。格は、正である、その不正を正して、そうして正に帰することである。」<sup>⑪</sup>と言つたのでしよう。このように訓詁をなしたのは、これ（格物）を内に向かわせて外に向かわせず、一所（心）に集中させようとしたのでしよう。さらに、かつてこの訓詁をおしひろげて、「意を親に事えるということに用いれば、親に事えるという事に即してこれを格し、親に事えるという事の不正なるものを正して、正に帰して、そうして必ずかの天理を尽くすのだ。」<sup>⑫</sup>と言つているようですが、なんと「知」の字に説き及んでいないというのは、すでに「その解釈が」收拾がつかないほど混乱して明らかにし難いことを示しています。果たして「あなたの」訓詁の通り、この『大学』のはじめでもしも事物に即して、その不正を正して正に帰することができれば、すっかりかの天理を尽くすことになるのなら、「その時点で」心もまた既に正しく、意もまた既に誠です。これに続く、「誠意」「正心」という条目は、むしろ屋上屋を架すものであり無用なのではないでしょうか。（如必以学不資於外求、但反觀内省以為務、則正心誠意四字、亦何不尽之有。何必於入門之際、便困以格物一段工夫也。顧經既有此文、理当尊信、又不容不有以処之、則從而為之訓曰、

物者、意之用也。格者、正也。正其不正、以歸于正也。其為訓如此、要使之内而不外、以會歸一処。亦嘗就以此訓推之、如曰、意用於事親、即事親之事而格之、正其事親之事之不正者、以歸于正、而必盡夫天理。蓋猶未及知字、已見其繳繞迂曲而難明矣。審如所訓、茲惟大学之始、苟能即事即物、正其不正以歸於正、而皆盡夫天理、則心亦既正矣、意亦既誠矣。繼此、誠意、正心之目、無乃重複堆疊而無用乎。

羅欽順による王守仁の「格物」説批判の主旨は、「格物」の訓詁が「事を正す」であれば、「正心誠意」の前に「格物」の工夫は不要であるし、それでも敢えて「格物」を最初にもつてくるとすれば、今度は「正心誠意」が無用となるということである。もつとも、この点については、贅言するまでもないことであろう。ただ、いまここで注目しておきたいのは、羅欽順の批判の中に見られる、「蓋し猶未だ『知』の字に及ばざるは、已に其の繳繞迂曲にして明らかにし難きを見す。」という部分である。

そもそも『大学』の経文において、「知を致すは物に格るに在り。(致知在格物)」と言うように、元来「格物」と「致知」とは相即不離の関係にあるが、当時の王守仁の「格物」の解釈からは「知」の問題が抜け落ちていたというのは言い過ぎにしても、少なくとも「致知」については工夫論の中で主要な位置づけを与えられていなかったことは事実であろう。そのため、徐愛(字は曰仁、号は横山、餘姚の人、正徳三年進士)をはじめとする高弟達でさえ、「格物」を王守仁のように解釈すると「至善」の所在をどうやって明らかにすればよいのかという点について大いに戸惑った様子が、『伝習録』上巻<sup>13</sup>における問答からはつきりと看取することができる。王守仁は、羅欽順への返書においてはこの問題について特に言及していないが、「知」をめぐる問題への対処は王守仁にとって喫緊の課題となったに違いない。

### 三、「大学古本序」改稿の問題と石刻

羅欽順に与えた書簡中で「致良知」の学説はまだ主張されていないが、恐らく、この羅欽順との学問的応酬が王守仁の思索を一気に深めさせる契機となり、「致良知」説の完成へと導いたものと思われる。つまり、この正徳十五年夏から正徳十六年にかけての頃は、王守仁の定論確立において最も重要な時期であったのである。特に、羅欽順からの批判の書簡を受け取り、それに対する反論・弁明の書簡を送った六月下旬以降はとりわけ学問的な考究が大いに深まった時期である。実際、その頃の王守仁のもとで学んだ陳九川（字は惟濟、号は明水、臨川の人、正徳九年進士）の記録した語録が『伝習録』巻下に収録されているが、それらの語録の中には「致良知」の学説に触れた議論も既にあらわれている。<sup>14</sup> このような時期に、王守仁が「知」の問題を中心に自己の『大学』観を根底から省察しなおし、併せて「大学古本序」を抜本的に手直しした可能性は大いに高いであろう。<sup>15</sup>

さて、そこで改めて「大学古本序」の改稿の詳細を確認しておきたい。<sup>16</sup> 次に示すのは、『困知記』三統に載録された旧本「大学古本序」を基本に据えて、通行本ではどういう改変が加えられたかがわかるようにしたものである。太字は、通行本で加筆された部分を示し、太字の直前の【】中の文章は、通行本において削除されたか、あるいは直後の太字の文に書き換えられる前の旧本の文章である。

『大学』之要、誠意而已矣。誠意之功、格物而已矣。誠意之極、止至善而已矣。止至善之則、致知而已矣。正心、復其体也。脩身、著其用也。以言乎己、謂之明德。以言乎人、謂之親民。以言乎天地之間、則備矣。是故、至善也者、心之



本体也。動而後有不善。而本体之知、未嘗不知也。意者、其動也。物者、其事也。【格物以誠意、復其不善之動而已矣。不善復而体正、体正而無不善之動矣】致其本体之知、而動無不善。然非即其事而格之、則亦無以致其知。故致知者、誠意之本也。格物者、致知之実也。物格則知致意誠、而有以復其本体、是之謂止至善。聖人懼人之求之於外也、而反覆其辭。旧本析、而聖人之意亡矣。是故、不【本】務於誠意、而徒以格物者、謂之支、不事於格物、而徒以誠意者、謂之虛。不本於致知而徒以格物誠意者、謂之妄。支与虚与妄、其於至善也、遠矣。合之以敬而益綴、補之以伝而益離。吾懼学之日遠於至善也、去分章而復旧本、傍為之什、以引其義。庶幾復見聖人之心、而求之者有其要。噫、【罪我者、其亦以是矣】乃若致知、則存乎心悟。致知焉尽矣。

周知のごとく、旧本「大学古本序」から通行本への改稿は、「本於誠意」から「本於致知」への改変であり、専ら「致知」の部分について加筆がなされていると言つても過言ではない。それ故、従来「大学古本序」の改稿は、「致良知」説の確立後に、「致良知」説に基づいて行われたとされてきた。そのような見方に対して根本的な異議を差し挟むことは困難であるが、ただ、「致良知」説確立の時期を、正徳十五年から正徳十六年にかけての時期に少し時間をひるげて比定すると、羅欽順との学問的応酬とそれを受けての「大学古本序」の改稿という求道活動そのものが、「致良知」説の確立を導いたという見方も不可能ではあるまい。つまり、「致良知」説確立の後に「大学古本序」をそれに基づいて書き改めたのではなく、「致良知」の学説の確立が、「大学古本序」の改稿を通してなされたのではないかということである。そして、「致良知」説を確信するとともに定稿成つた「大学古本序」を、後述する正徳十六年五月の白鹿洞書院における講学会の直後に、「古本大学」「古本中庸」「修道説」とともに白鹿洞に刻したのではないかと思われるのである。

#### 四、鬱孤山の石刻と濂溪書院

王守仁の白鹿洞の石刻が正徳十六年五月の白鹿洞書院における講学会の後に成されたことを推測させる傍証は他にもある。それは、王守仁が贛の西南の鬱孤山にも同様の石刻を行っている事実である。

費宏（字は子充、鉛山の人、成化二十三年進士）が撰した「移置陽明先生石刻記」<sup>18</sup>（『王文成公全書』卷三十八「世徳紀附録」）によれば、王守仁は鬱孤山に、『大学』と『中庸』の古本の大意を叙述した自己の文章を、周敦頤の『太極図説』と一緒に石に刻んだと言う。

昔、王陽明先生が贛で兵を督した際には、学者や役人と聖賢の学を研き修め、官僚から庶民さらには周辺を通りかかった旅人に至るまで、みな学業を授かり道について尋ねた。かくて、濂・洛の「学問の」伝承はこの時再び明らかとなった。……また『大学』と『中庸』の古本からその重要な点を抽出して叙述し、「その文章を」濂溪の『太極図説』と並べて鬱孤山上の石に書した。……（昔陽明王先生督兵于贛也、与学士大夫切劘于聖賢之学、自縉紳至於閭閻、以及四方之過賓、皆得受業問道。蓋濂洛之伝至是復明。……復取大学中庸古本序其大端、与濂溪太極図説聯書※石于鬱孤山之上。……）※「石」、原作「不」字。

なお、『「順治」贛州府志<sup>19</sup>』の「太極亭」の記載によれば、万暦年間には都御史張岳（字は汝宗、号は龍峰、餘姚の人、嘉靖三十八年進士）が濂溪祠の後ろに太極亭を建て、そこに王守仁の書した『太極図説』『大学古本序』『中庸説』の石刻を陳列したとあるので、費宏の言う「『大学』と『中庸』の古本を取りて其の大端を序した」文章とは、「大学古本

序」と「中庸説」すなわち「修道説」のことであつたようである。

記載内容から、費宏がこの文章を書いたのは、「嘉靖壬寅」すなわち嘉靖二十一年（一五四二）頃のことであるのがわかるものの、王守仁が鬱孤山に石刻を行つたのが何時のことであるかを確定できる資料はない。しかしながら、やはり文章中に、

先生が贛を去られてから二十余年になり、石は風雨によつて破損した部分が日を追うごとに剥落しており、しかもこの山は再び役所の管理となり、「石刻を」見る者の入山が不便である。……（先生去贛二十餘年、石為風雨之所摧剥者日就缺壞、而是山復為公廨所拘、觀者出入不便。……）

と言つていふことからして、それがおおよそ正徳年間の後半以降のことであつたと推測できる。そして、注目すべきは、上記のようにその石刻に『太極図説』が含まれていること、それに、その石刻のなされた場所が、濂溪書院のあつた鬱孤山であるという点である。『年譜一』によれば、正徳十三年九月、王守仁は濂溪書院を修復している。

九月、濂溪書院を修復した。

四方から学ぶ者が集まつてきたので、始めは射圃に住ませたが、收容不能になつて、そこで濂溪書院を修復してここに居住させることにした。（九月、脩濂溪書院。四方学者輻輳、始寓射圃、至不能容、乃修濂溪書院居之。）

と言つており、濂溪書院の修復は、王守仁のもとで講学に従事することを求めて増え続ける門人達の居場所を確保することが目的であつたようである。この時期、王守仁は既に朱熹の「格物」説を批判して創出した独自の「格物」説とその学説の拠り所となつた『古本大学』観に強い自信を抱き、かつ「知行合一」の学説をも提唱していた。しかも、この正徳十三年の七月には、『古本大学』、『朱子晚年定論』を相次いで刊行し、ついで八月には『伝習録』の初刻本も門人の手で

刊行されている。つまり、王守仁の学問人生を「致良知」説の定論確立の前後で二期に分けるとすれば、濂溪書院で門人と講学を行った時期はまさにその前半における絶頂期であったと言えるのである。

ところで、朱熹が周敦頤の学問をいかに尊崇したかは周知のことであるが、王守仁は周敦頤の学問についてそれほど多くを具体的には語っていない。しかしながら、「朱子晩年定論序」（『文録四』）に、

洙泗の伝は、孟子に至つて途絶えた。千五百年余りして、濂溪と明道がはじめて再びその端緒を尋ね求めたのである。

（洙泗之伝、至孟子而息。千五百餘年、濂溪、明道始復追尋其緒。）

と言うように、周敦頤を程顥とともに孔子の学問の継承者として高く評価していたと思われる。なお、周敦頤の『太極図説』に対する王守仁の透徹した理解を示す文章として、『伝習録』巻中に収められた「答陸原静書」二篇があり、そこにもその関心の高さを読み取ることができる。

このような周敦頤を祀る書院を修復し、その書院で門人達と講学を行った王守仁が、周敦頤の代表的著作『太極図説』に併せて「大学古本序」と「修道説」を石刻したという事実は実に注目し値することである。<sup>20</sup> 恐らく、王守仁の胸中には朱熹が最上級の敬意を払った宋学の開祖周敦頤に対して、自己の『古本大学』『古本中庸』に関する学説の正しさを自信を持って問う気持ちがあつたであろう。

ともあれ、この鬱孤山の石刻のことが上記のような事情であるとすれば、王守仁の白鹿洞書院における石刻の件も、やはり正徳十六年五月に白鹿洞書院で講学を行った際になした可能性が益々高くなるのではあるまいか。

## 五、白鹿洞書院と王守仁

『年譜二』によると、正徳十五年（一五二〇）の正月、無理な親征を企てたうえ、寧王宸濠の乱が収束してもまだ京師に戻らぬ武宗の動向に対して心に深い憂いを抱きつつ、王守仁は白鹿洞に遊び多くの詩文を残したという。ただ、今確実にそれとわかる詩文は多くは残存していないようであり、それらの詩文の中に白鹿洞書院の講学や朱熹の学問に関わる内容のものがあったのかどうかは定かでない。

さて、その後この年の十二月には、武宗の駕が都に還つたのを聞き、王守仁はようやく憂念を解消することができた。そして、既述のように、『年譜二』が「良知」説を確信するに至つた王守仁の境地を縷々記しているのは、その明くる年の正徳十六年正月の条においてである。ちなみに、『年譜二』にはその記述に続いて、陸九淵の子孫を顕彰したことが「象山文集序」を執筆したことが述べられており、その後の五月の条に、門人を白鹿洞書院に集めたことが記録されている。

五月、門人を白鹿洞に集めた。

この月、先生は帰郷の意志があり、同門の者達を永く結集させ、一緒にこの学（「致良知」の学問）を明らかにして欲しいと思つた。たまたま、南昌府の呉嘉聡（字は惟徳、号は鴈山、湘陰の人、正徳六年進士）知府が「府志」を編纂しようとしており、当時、蔡宗堯（字は希淵、号は我齋、山陰の人、正徳十二年進士）君が南康府学の教授として白鹿洞書院の事務をつかさどっていたので、そこで白鹿洞中に編纂所を開かせ、夏良勝（字は於中、南城の人、正徳三年進

士)、舒芬(字は国裳、進賢の人、正徳十二年進士)、万潮(字は汝信、号は立斎、進賢の人、正徳六年進士)、陳九川君等を集めて、一緒にそれに従事させた。(五月、集門人於白鹿洞。是月、先生有歸志、欲同門久聚、共明此学。適南昌府知府吳嘉聰欲成府誌、時蔡宗堯為南康府教授、主白鹿洞事、遂使開局於洞中、集夏良勝、舒芬、万潮、陳九川同事焉。)

当時、王守仁は寧王宸濠の乱を平定し、郷里に戻ろうと考えていた時期であった。おりしも、南昌知府の吳嘉聰が『南昌府志』編纂を企画し、南康府学教授の任にあつた王守仁最古參の門人の一人蔡宗堯に囑して編修局を白鹿洞書院に開設させ、王守仁の門弟達にその編纂作業を手伝ってもらつていたのである。このような状況にあつて、王守仁は最古參の弟子や、時人から「江西四諫」(『明史』卷百八十九「万潮伝」)と称された優秀な門人達を參集させ、白鹿洞書院において自己の学説を思う存分に講義したに違いない。なお、この時王守仁は、安福にいた高弟の鄒守益(字は謙之、号は東廓、安福の人、正徳六年進士)にも書簡(『文録二』「与鄒謙之」)を送つて、

この頃この思想(「良知」説)についてますますしつかり理會するようになり、国裳もまた篤く信じるようになった。その上貴君が一度やつてくれば、きつと一層充実するに違いない。……「まもなく貴君も都で仕官することになるから」この講学会は必ずや急いで実施しなければならぬ。「貴君も」のんびりとやつてきてはいけぬ。蔡希淵は最近白鹿洞書院を主管しており、諸同志達が私が山(廬山の五老峰)に到着するのを待つて、一緒に講学を行うというのはとりわけすばらしい。今はあわただしく考えを十分に述べることはできない、このことについて「会つて一緒に」語り合いたいものだ。(近来此意見得益親切、国裳亦已篤信。得謙之更一来、愈当沛然矣。……此会宜急図之。不当徐徐而来也。蔡希淵近已主白鹿、諸同志須僕已到山、却来相講、尤妙。此時却匆匆不能尽意也、幸以語之。)

と、白鹿洞書院の講学会に鄒守益が参加することの意義を語り、すぐに来るよう説いている。<sup>22</sup>このような記録からもうかがえるように、この時の白鹿洞書院の講学会は王守仁にとって大変熱意のこもった重要な講学会であったと思われる。

「致良知」説を確立し、朱熹の学説から完全に訣別し得たと自負する王守仁が、その学説を門人達と朱熹講学の旧跡である白鹿洞書院で確認し合った後、昂ぶる思いを胸に、講学の記念としてこの地に『古本大学』『大学古本序』『古本中庸』『修道説』を石刻として遺したとしても何ら不思議はないであろう。

とはいうものの、仮にこの白鹿洞書院の石刻を正徳十六年の講学会の際のものと考えた場合、解釈に困難が生じる資料があるのも事実である。それは、嘉靖二年（一五二三）二月に門人の薛侃（字は尚謙、号は中離、揭陽の人、正徳十二年進士）に宛てて送った書簡（『文録二』『寄薛尚謙』）の内容である。その中において王守仁は、

「致知」の二字は、千古の聖学の秘訣であり、以前虔にいた時に、終日これについて議論したが、同志の中には依然すつきりと理解できていない者がまだ多かつた。近頃、「古本序」中の数語を改め、かなりこの考えを明らかにした。

しかしながら、「これを」見る者は、往々にしてやはり明晰に理解できない。今一紙を送るので、どうか熟読玩味されたい。（致知二字は千古聖学之秘、向在虔時、終日論此、同志中尚多有未徹。近於古本序中、改数語、頗發此意。然見者往往亦不能察。今寄一紙、幸熟味。）

と述べているのである。つまり、この書簡にいう「向に虔に在りし時云々」という言葉からは、「大学古本序」の修正が、王守仁が虔すなわち贛をすでに離れた後に、当時の門人達との議論の光景を思い出しつつ行われたように理解される。もし、ここに言う「大学古本序」の修正を正徳十六年（一五二二）五、六月以前とみなすことができれば問題は生じないのだが、しかしながら、嘉靖二年二月の時点でそれを「近」と言えるかどうかである。一年半以上の出来事を「近」と解

釈するのは、常識的に考えれば少々無理があると言わざるを得ない。<sup>23</sup>

もっとも、今度は逆に、「大学古本序」の最終稿の成立時期が嘉靖二年頃であったとすると、その最終稿の石刻は、一体いつどこに誰によつてなされたのであろうか。白鹿洞書院に残る「大学古本序」の文章は、『王文成公全書』所収の文章と全く同じであるから、最終稿の成立が嘉靖二年頃であったとすれば、その石刻も当然それ以降になされたことになる。もしも、白鹿洞書院の石刻が嘉靖二年以降のものであるとすれば、王守仁がこの時期に、改稿した文章をわざわざ白鹿洞書院にもたらして石刻を依頼したということなのであろうか。

残念ながら、このあたりの事実関係については、今の段階ではつまびらかにし得ないが、現時点での論者の解釈を述べれば以下の通りである。つまり、嘉靖二年二月の時点での修正は、文字通り「数語」の改変にすぎず、それは薛侃宛の書簡に「今一紙を寄す」と言うように、手抄の草稿の状態であった。しかし、その草稿は最終的には王守仁の意に満たない<sup>24</sup>内容であったので、その後破棄されてしまった。そして、既引の資料すなわち嘉靖三年（一五二四）の書簡（「与黄勉之」）の中で王守仁自身が、「石刻は其の最後の者なり」というように、白鹿洞書院の石刻を最終稿と認めた。その言葉を尊重して、王門においては、正徳十六年の白鹿洞書院の石刻本を最終稿とみなすこととなり、『王文成公全書』の元となった『陽明先生文録』を編纂する時にも、石刻本を収めたということではないであろうか。

#### おわりに

王守仁の思想を語る上で最も重要な資料の一つである「大学古本序」の最終稿である石刻が、いつ頃の時期に、どうい



う場所に、いかなる経緯で刻されたのかという問題が従来未詳であるのは何とも不思議である。ただ、思うに、このような重要な文章を何でもない場所に刻するということは考えられないから、きっとそれに相応しい場所を選んだはずである。ただし、石刻の文章自体は、「大学古本序」の定稿として『陽明先生文録』そして『王文成公全書』に収録され書物の体裁で広く流布したため、かえって石刻の存在はその後関心を集めなくなってしまったのかも知れない。

ところで、王守仁と白鹿洞書院との直接的な関係は、記録に残る限りそれほど密接なものであるとは言いがたい。しかしながら、朱熹及び陸九淵の講学の旧址である白鹿洞書院は、当然ながら王守仁にとって特別な感興を催す場所であったことは確かである。そのような場所に、朱熹の学説を批判的に乗り越えたことの記念碑的著作である『古本大学』『大学古本序』、及びそれらと対になる『古本中庸』『修道説』を石刻することは、思想家王守仁の人生において大いに意味あることであつたと思えるのである。

小論においては、まだ論証が不十分な部分も残るが、ただ、もし小論が考えるように白鹿洞書院の石刻が、正徳十六年の講学会の際に王守仁自身によつてなされたものであり、それが「大学古本序」の最終稿となつたのだとすれば、従来言われるように、まず「致良知」説を創出し、それに基づいて「大学古本序」を改稿したのではなく、そもそも「致良知」説を生み出す思索そのものが、「大学古本序」の改稿を契機とした『古本大学』をめぐる思索と表裏一体の関係にあつたのであり、「致良知」説確立の過程に『大学』観の再構築という課題が深く関与した、とみなすことが可能になるのではないだろうか。

- (1) 『古本大学傍釈』は、王守仁の著作集の類に載録されておらず偽作説までであるが、水野実氏は、「王守仁の『大学古本傍釈』の考察」（『日本中国学会報』第四十六集 一九九四）において様々な角度から考察を試みた上で、現存する三本のうち『丘陵学山』所収本が、「守仁の親書として極めて信憑性が高い」（一四八頁）と結論つけておられる。
- (2) 小論では、王守仁の著作は、『四部叢刊初編』所収の隆慶刊本『王文成公全書』の影印本を底本とし、呉光氏等編『王陽明全集』上・下（上海古籍出版社 一九九二）を適宜参照した。小論に言う『文録』『伝習録』『年譜』は、全て『王文成公全書』所収のものである。
- (3) 孫華驊氏等編『白鹿洞書院碑刻摩崖選集』（白鹿洞書院叢書之四 北京燕山出版社 一九九四）、周鑾書氏等著『千年学府——白鹿洞書院』（江西人民出版社 二〇〇三）参照。但し、前者の翻刻には若干の誤りがある。ちなみに、東北大学附属図書館には、大正九年十二月七日に作成したとされる拓本が蔵されている。この拓本の閲覧に際しては、渡辺健哉氏に御協力頂き、また併せて書誌的な情報について御教示頂いた。謹んで御礼申し上げたい。
- (4) 白鹿洞書院古志整理委員会整理『白鹿洞書院古志五種』（中華書局 一九九五）所収の嘉靖三十三年序刊本、及び趙所生氏等編『中国歴代書院志』第一冊（江蘇教育出版社 一九九五）所収の嘉靖四十五年増刻本参照。『白鹿洞書院碑刻摩崖選集』に掲載される写真、東北大所蔵の拓本と比較すると、鄭廷鵠の翻刻には少なからぬ誤りが見られる。なお、『白鹿洞志』のこの記載について注意を払った研究に、鄧洪波氏『中国書院史』（東方出版社 二〇〇四）がある。但し、氏は石刻がなされた時期を正徳十三年とみなしている（二九〇頁）。
- (5) ……或曰、「陽明之言、大与文公不合、録之無乃滋惑与。」鵠対曰、「夫道猶日也、出於扶桑、是謂晨明、对于昆吾、是謂正中、薄于虞泉、是謂秦蒙。其美一日也。文公之言、猶自晨明、以次而至於秦蒙、有目者共見宛然此日也。陽明之言、猶対昆吾而号于衆、曰、出於扶桑、此日也、薄于虞泉、亦此日也。日未嘗異、自其所見処有不同爾。」或亦曰、「然則以敬為綴、以伝為離、無乃肆訕歟。」曰、「不然。用敬作新、程子之言也。補伝、程子之意也。陽明既不以程子為然、故求正於文公也。昔象山辯『太極図』、極其詆毀、千載而下、畢竟不以其言為濂溪病者、何也。獲正於文公故也。是刻千里而致之洞中、安知非此意耶。」
- (6) 『年譜二』の正徳十六年正月の条に、「是の年、先生始めて『致良知』の教えを掲ぐ。（是年、先生始掲致良知之教）」と言うように、錢緒山をはじめとする王門の高弟の見解では、王守仁の定論確立は正徳十六年のこととされる。論者は基本的にこの説を尊重するものであるが、ただ、従来より指摘される通り、王守仁が「致良知」をめぐる思索を深め、その重要性に言及し始めるのは

この前年のことである。つまり、「始掲」とは、自己の思想の定論として始めて掲げたの意と解するべきであろう。なお、この問題については、山下龍二氏『陽明学の研究 成立編』（現代情報社 一九七二）第三章の二の（一）「思想変遷の区分と致良知説の始掲年」を参照。

(7) 『困知記』については、閻韜氏点校『困知記』（理学叢書 中華書局 一九九〇）を参照した。

(8) 羅欽順が見たという『陽明先生文録』が初めて刊行されたのは、『年譜三』の記録によれば、嘉靖六年（一五二七）四月のことであつたとされるので、羅欽順が改訂版の「大学古本序」を見たのは、王守仁が最後に稿を改めた時から既にかんりの時がたつた後のことである。ちなみに、王守仁の各種著作の成立や版本の問題については、永富青地氏『王守仁著作の文献学的研究』（汲古書院 二〇〇七）において、詳細な考究がなされている。

(9) ここに言う『伝習録』とは、正徳十三年八月に門人薛侃が刊行した（『年譜一』）初刻本のことである。

(10) 羅欽順の批判は、王守仁の『大学』解釈と『朱子晚年定論』の内容に関するものがほぼ半々であるが、王守仁の返書を見る限り、『朱子晚年定論』への批判に対する反論は、「格物」をめぐる主張に比べれば、明らかに弁解口調である。なお、王守仁の「答羅整庵少宰書」の有する意義については、吉田公平氏『伝習録』（鑑賞中国の古典一〇 角川書店 一九八八）一五六頁以下を参照。

(11) この「物者、意之用也。格者、正也。正其不正、以歸于正也。」という訓詁は、この書簡のただけではなく、嘉靖七年冬に再度王守仁宛に送ろうとして準備したものの王守仁の急逝により発送しなかつた書簡「又 戊子冬」（『困知記』附録）の中にもそのまま引用し、「此執事格物之訓也。」と述べているので、あるいは羅欽順が王守仁から贈られた『大学古本』に附せられていた「格物」であろうか。但し、「格者、正也。正其不正、以歸于正也。」という言葉は、『伝習録』巻上にも見られる。

(12) この「意用於事親、即事親之事而格之、正其事親之事之不正者、以歸于正、而必尽夫天理。」については、水野氏前掲論文で「現存の『格物』に確かに一致する文が存在する」（一四五頁）と指摘されている。同氏作成の校本（一三九頁）を参照する限り、完全な一致ではないようであるが、但し、羅欽順の引用が原文そのままであつたかどうかかわからない。

(13) 幾つかの例を示す。「愛問、『至善只求諸心、恐於天下事理、有不能尽。』先生曰、『心即理也。天下又有心外之事、心外之理乎。』愛曰、『如事父之孝、事君之忠、交友之信、治民之仁、其間有許多理在。恐亦不可不察。』……」、「鄭朝朔問、『至善亦須有従事物上求者。』先生曰、『至善只是此心純乎天理之極便是。更於事物上怎生求。且試說幾件看。』朝朔曰、『且如事親、如何而為温清之節、如何而為奉養之宜、須求箇是當、方是至善。所以有學問思辨之功。』……」、「愛問、『昨聞先生止至善之教、已覺功夫有用力處。但与朱子格物之訓思之終不能合。』先生曰、『格物是止至善之功。既知至善、即知格物矣。』愛曰、『昨以先生之教、推之格物之說、似亦見得大略。但朱子之訓、其於『書』之『精一』、『論語』之『博約』、『孟子』之『尽心知性』、皆

- 有所証拠。以是未能釈然。』……」
- (14) 「庚辰往虔州再見先生、……」[先生]曰、爾那一点良知、是爾自家底準則。爾意念著處、他是便知是、非便知非、更瞞地一些不得。爾只不要欺他、實實落落依著他做去、善便存、惡便去、他這裡何等穩當快樂、此便是格物的真訣、致知的実功。若不靠著這些真饑、如何去格物。我亦近年体贴出来如此分明、初猶疑只依拘恐有不足、精細看、無些小欠闕。」なお、「知」を本体とみなす議論は、『伝習録』巻上にも既に現れている。「又曰、知是心之本体。心自然会知。見父自然知孝、見孺子入井、自然知憫隱。此便是良知。不假外求。若良知之發、更無私意障礙。即所謂『充其惻隱之心。而仁不可勝用矣』。然在常人不能無私意障礙。所以須用致知格物之功、勝私復理。即心之良知更無障礙、得以充塞流行。便是致其知。知致則意誠。」
- (15) 實際、この時期に送られたと思われる、「与陸清伯書」(『文録続編二』)にも、「『大学古本』一冊寄去時一覽。近因同志之士、多於此處不甚理會。故『序』中特改數語。」と述べている。但し、旧稿から最終稿に至るまでの改稿は、「改數語」にとどまるものではない。なお、この書簡が送られた時期の考証については、山下氏前掲書第三章の二の(五)(C)「『大学古本序の改稿』参照。
- (16) 新旧両序の比較は、山下氏前掲書「『大学古本序の改稿』」においても既になされている。
- (17) 王守仁の前期の思想を特色づける「誠意」説が最も簡明に述べられているのが旧本「『大学古本序』」であるから、その思想をより深化させる上で旧本「『大学古本序』」の内容の見直しは必須であったはずである。この点については、吉田公平氏「陸象山と王陽明」(研文出版 一九九〇)Ⅲの四の四「前期の誠意説」参照。
- (18) 『太保費文憲公摘稿二十卷』(明人文集叢刊 文海出版社 一九七〇)には、この文章は見られない。
- (19) 「在府西濂溪祠之後、万曆甲申張都御史岳建、列陽明先生所書『太極圖説』「『大学古本序』」及「中庸説」諸石刻于其中、太史楊起元有記。」傍線部の如く、楊起元に記があると言うが、『続刻楊復所先生家藏文集八卷』(『四庫全書存目叢書』集部・第一六七冊所収)には当該の記は見られない。
- (20) 石刻のことについては、大西晴隆氏『王陽明』(人類の知的遺産二五 講談社 一九七九)一六三頁に指摘が見られる。但し、大西氏は濂溪書院のことについては言及していない。ちなみに、鬱孤山に刻された「『大学古本序』」は、その二箇月前に『古本大学』を刊行した際に執筆した旧本であったはずであるので、その点からしても、王守仁は後に改めて定本を石刻する必要を感じたに相違ない。
- (21) 『年譜二』に言うように、「致良知」説を確立し、その直後に陸九淵の顕彰を行い、さらに、朱熹と縁の深い白鹿洞書院で講学を行うというのは、なるほど順序としては整合性があるように思うが、但し、『王文成公全書』に収められた関連の文章は、「褒崇

陸氏子孫」(卷十七)が正徳十五年正月の作になっており、また、「象山文集序」(卷七)も、庚辰すなわち正徳十五年の紀年がある。他方、嘉靖刊本『象山先生全集』(『四部叢刊初編』)に冠された王守仁の「序」は、正徳十六年七月朔の日付になっている。このあたりの事実関係は未詳である。待考。

(22) この時、鄒守益が白鹿洞書院に駆けつけたのかどうかは定かでないが、『伝習録』卷下によれば、この翌々年には浙江にいる王守仁のもとを訪れ数日間講学を行っている。この時、去ってゆく鄒守益を見送った王守仁は嘆き悲しんでやまず、どうしてそれほどまでに彼のことを深く思うのかと門人に尋ねられると、鄒守益の人となりを顔淵になぞらえている。(癸未春、鄒謙之来越問学、居数日、先生送別於浮峰。是夕与希淵諸友移舟宿延寿寺、秉燭夜坐、先生慨悵不已、曰、「江濤煙柳、故人倏在百里外矣。」一友問曰、「先生何念謙之之深也。」先生曰、「曾子所謂『以能問於不能、以多問於寡、有若無、宜若虛、犯而不校』、若謙之者良近之矣。」)

(23) 「寄薛尚謙」は『文録二』の紀年も『年譜三』の記述もともに「癸未」すなわち嘉靖二年のこととするが、永富氏前掲書の指摘(一五三頁)によれば、「寄薛尚謙」の「癸未」という紀年は「乙酉」の誤りであるという。乙酉すなわち嘉靖四年が正しければ、ここに言う「大学古本序」の修正は、最終稿を石刻した後に行なったことになる。

(24) あるいは、修正した文章には「良知」の語を書き加えており、それが『大学』の序文として残すには内容的に相応しくないと考えたのかも知れない。この辺の事情については、後に『大学問』の刊行を請われた際に当初拒絶した(『文録続編一』「門人有請録成書者。曰、此須諸書口口相伝。若筆之於書、使人作一文字看過無益矣。」)王守仁の心情に通ずるものがあるかもしれない。

(25) 王守仁と白鹿洞書院の関係を考える際には、正徳十年(一五一五)、王守仁四十四歳の秋に進士同年である徽州知府の熊桂(字は世芳、号は石崖、新建の人)に請われて書いた「紫陽書院集序」(『文録二』)に見られる「白鹿洞学規」をめぐる議論が特に重要である。そこにかがわれる王守仁の「白鹿洞学規」観は、正徳十六年九月に蔡宗兗が書いた「白鹿洞規説」(『白鹿洞志』卷六ほか)にも踏襲されている。ただ、小論においては、論述の関係上それらの具体的内容に言及できなかった。

(福岡教育大学教育学部教授)